
とある科学の影使い

アーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の影使い

【Nコード】

N0203V

【作者名】

アーク

【あらすじ】

主人公 日向駿は「影使い」のLV5
普通の学園生活を送る駿の日常はある事件によって大きく変わっていく・・・

そして学園都市の間、魔法などに巻き込まれる。

科学と魔術が交錯する時物語は始まる・・・

* 注意 *

私はアークではありません

ちゃんと許可を得て借りています

それでもいいという人はぜひ読んでください！
感想とかくれるとうれしいです！！

1話 不幸の始まり

「だあゝ不幸だあゝ！！」と叫ぶ声が暗い路地裏に響く

「それもこれも全部お前のせいだろうが」と俺、日向駿は走りながら冷静に言う

「何それっ！なんか全部上条さんが悪いみたいにきこえるんですけど」とツツこんでくるツンツン頭の少年は上条当麻、俺の親友だ

「別に間違っただろ！お前の・・・」と言いかけた俺の耳に「バチバチッ」という音が届く

「やべえっ、当麻よけろっ！」と言いつさに突き飛ばす　その直後「ドゴオッ」という轟音をたてさつきまで当麻がいた場所を何処からか飛んできた雷の槍が粉々にした。

「危ねえっ！！」ってか今の当たってたら死んでたぞっ！！」当麻の視線の先にはこの辺りでは有名なお嬢様学校の常盤台の制服を着た一人の女の子がいる。

普通の野郎なら喜ばずの状況だが・・・俺たちは違う

なぜなら今俺たちが逃げているのは・・・こいつからだからだ

この不幸の始まりはある数時間前のある事件から始まった。

放課後に当麻に「気分がいいから飯をおごってやるよ」と言われ、ついてきたのが運のつきだった・・・

なぜならこの男どこかの借金執事もびっくりなほどの不幸体質だからだ。

そんな奴が気分のいい日に不幸がやって来ないはずがなかった・・・飯を食い終わった後、当麻が樋口を天に召され、嘆いているのを華麗にスル・シファミレスを出たところである事件は起きた・・・ふと、周りを見るとそこには数十人の不良に囲まれる一人の女の子がいた。

同じく俺と同じ光景を目にした当麻は一言「助けるか！！」

だが、俺も当麻もこの子を助けようとしたことを後で死ぬ程後悔す

ることになる・・・

不良たちに近づき「あんたらやめろよ」的なことを言おうとした俺の耳に「バチバチッ」という電撃音が聞こえる・・・そして俺は気づいた・・・「あれゝなんかやばそうな電撃出てるよ、あの子ゝ」

そして「ちよつと待て当麻あつ!!」だが時既に遅し

「さつきからうつさいのよアンタたちっ!!」と少女は怒号と共に雷の槍を飛ばす。

え? 誰にだつて? もちろん不良達に決まってるじゃん・・・俺たちも巻き添え食ったけど・・・

だが、こつちには上条当麻がいる

どんな力も異能の力ならまとめて消し飛ばすというふざけきった右手、幻想殺しを持つ男が!!!

「あつぶねゝ!!」難なく攻撃を防ぐ当麻を見て「こいつ、こういう時だけ役に立つんだよなあゝ」とか思ったりもする。

そこからまあ色々あつて今に至るといわけだ・・・

「まちなさいよあつ!!」「待てと言われて待つ馬鹿がどこにいるっ!! そう言われて待った奴をおれは見たことがねえっ!!」と俺は叫ぶ・・・がそれがいけなかった・・・

「へゝそう、ならしかたないわねゝ」と奴はポケットから取り出したコインを宙に弾きあげる

「嫌な予感が・・・」と右手を構える当麻を俺は抑え、「あれは駄目だ、右手以外に当たったらお前死ぬよ」「じゃあどうすれば・・・」「俺に変われ」と一歩前に俺は出る。

次回 駿の本領発揮です!!!

単純だな（前書き）

夏期講習たいへんです・・・

単純だな

「あんた達レールガンって知ってる??」と他人から見たら凄い笑顔で電撃女が俺が尋ねる。

「いやゝ知らんこともないが?」

「あつそ、じゃあ威力確かめてみたらあつっ!」と俺に向かってレールガンをぶっぱなしてくる。その光線は俺に音速の三倍の速さで俺に向かってくる・・・が、

「はあゝ単純だなお前」

(御坂side)

はあ?今あいつはなんて言った? 単純ですって!?

その減らず口今すぐにとじてやるんだから!!

・・・でもなんなのあいつのあの余裕・・・あのツンツン頭も妙な能力持つてるけど、あいつもあんな感じの能力持つてるわけ?と考えている私の前で見たこともない事が起こった。

いきなりあいつの足元から何かが出てきたと思った瞬間あと少しであいつに当たるところだった私のレールガンを・・・の、飲み込んだ?」 呆然としてる私の耳にあいつの言葉が届く。

「俺の能力説明しとくか?・・・それとも見せた方が早いかな?」とあいつはそう言った後に小さい声で何か呟いたと思った瞬間、私の頬の近くを何かが掠めた。

「えっ!?!」と後ろを振り向いた瞬間「ドゴオオッ」とものすごい轟音が響く。

いったい・・・何をしたのあいつは!?

(駿side)

ははっそりゃビックリするよな・・・かわいそうだから教えてやるか!

「俺の能力は「影使い」（シャドウマスタ）のLV5だ・・・今は「反転」（リバース）って言ってな相手の技の影をコピーして手に打ち返す技だ。」「なによそれっ！ほとんどチートじゃないっ！...」
「...というか私のレールガンのダメージはどこ行つたの？」「...」
「...えっ??」「もしかして...」知らないとかいわないでよ！
「畜生...凶星だぜ！あの野郎勘良いな...」とか思つたのは秘密だがここは正直に...

「知りません（笑い）」「なによそれ!!」「いや、俺原石らしいんだよね、だから詳しいことは知りません」「はあ...」と解つたようになわからなかったような顔をしている電撃女を置いて
「さあ、逃げるぞ当麻!!」と俺たちはエスケープを開始する。

「あっ!!ちよつとっ!!」と叫んでいる電撃女を無視して逃げる。

日常の終わり・・・そして・・・

今日から夏休みだあゝとか騒いでいるのは俺の同室の馬鹿（上条）ぐらいだろうな・・・

俺は普通に起きて時計を見ると「5：15分？早く起きすぎたか？」とテレビをつける。

幸せそうに寝ているやつがいるが気にしない。自分の幸せのために多少の犠牲はやむをえまい・・・

が、俺の目にある数字が飛び込んでくる「8：15分だつ！！馬鹿なつ！！」と叫ぶ俺の横で「あれー起きんの早くね？まだ5：15分だぜ？」とかほざいてるやつが約一名。

「お前は馬鹿か？馬鹿なんですか？」と顔をテレビに向けさせる。

「おゝみのさんじゃん・・・って8：15分！？」と俺と同じリアクションをとる。

この馬鹿は少しほつとくか・・・

「それにしても・・・暑ちい 換気でもすつかかな」と窓を開けた俺の目の前になんかシスターがぶらさがっていた。

「・・・は？」と呆然としている俺にシスターが一言「お腹空いた・・・」「・・・知らねえよっ！！」とツツこんで窓を勢い良く閉める俺に当麻が「なんだ？一人漫才でもやってんのか？」と声を掛けて来る。

「そう見えるなら眼科に行くことを勧める・・・ちよつと窓開けてみ？」とあれの処理を当麻に任せてソファーに座る。

さあ、親友よ・・・どんな反応をするか見せてもらおうか・・・

「ん？なんか踏んだ・・・焼きそばパン・・・不幸だあゝ」と潰れたパンを持ちながら窓を開ける。

「・・・え？」まあ当然の反応だろうな「おなか減った」まだ言ってるのか、あのシスターは・・・

「とりあえずこれ食うか??」なぜそうなるんだっ！！！！当麻っ！

！そんな潰れたパン誰も・・・

「ありがとう！！！」食うのかよっ！！

はあ・・・なんだこの状況・・・

んゝ俺なんか忘れてる気が・・・と考えていると「ブブツ」と俺の携帯が振動する。

「はい、もしもし・・・」「駿っ！！あんたっ何処にいるの！？」「あれ？綾？どうしたこんな時間に・・・」今電話をかけてきているのは幼馴染の白神綾。

こいつは常盤台のLV5で「心理掌握」の持ち主だ。

はあゝどうしてこう常盤台には凶暴なのが・・・

「なんか今変なこと考えたでしょ？」「待て！！勝手に人の頭の中覗くなっ！！」今のがばれたら・・・死ぬっ！！

「それよりあんた忘れてないでしょうね？」「え？？」「あんた私の買い物に付き合うつて約束したわよねえ？？」忘れてたっ！！確かにそんなことを約束した気がする。まあ、約束したといっても無理やり・・・「へえゝ無理やりねえ・・・」「だからっ！！頭の中覗くなよ！！」「早く来なさいよ！！」

「はいはい」と電話を切る。

「誰からだっただ？」「綾からだっただ・・・という事で俺出かけるから、そいつよろしく」

「はあっ！？お前こいつのことおれに丸投げするつもりかっ！！」と当麻が怒鳴る。

「大丈夫だ当麻・・・神は乗り越えられる試練しか与えないってどっかの医者と言ってたぜっ！！」とビシッとサムズアップを決め逃走する。

だが神という奴は俺たちには乗り越えられない試練しか与えないらしい・・・

俺はそれを嫌という程味わうことになる・・・

日常の終わり・・・そして・・・(後書き)

次回はあの人が出てきます!!

v s 原子崩し (前書き)

読みにくいところのご指摘をいただいたので、改行を多くしました！

V S 原子崩し

はぁ・・綾の奴、人のことなんだと思ってたんだよ・・と考えながら急いでいると

俺の目に非常に見覚えのある光景が映る。

「デジャヴか？」その光景とは一人の女の子を数十人の不良が囲んでいる光景だった。

立ち止まって考えている俺の頭には選択肢が二つあった。

1、助ける

2、スルー

これは・・「二番のスルーだろ、うん」と一人で納得して歩きだそうとした。

しかし、「ビュッ」「うおっ！」と鼻先を白い光線が掠める。

「あんた、女の子がからまれてんのに無視とはいいい度胸じゃない？」

ああ・・大体分かってきたぞ俺の運命が・・

「ブチ殺し確定ね？」くそおっ！何故俺の頭には逃げるという選択

肢が浮かんでこなかったんだあつ！

「ほらっ！ボーツとしてんじゃないわよ！」と白い光線を俺に飛ばしてくる。

「やば・・っ」「ドガアアン」

「はぁ・・雑魚相手に何やってんのかしら、私」と女は土煙を見ながら呟く。

が、「雑魚で悪かったな、この野郎」そこには無傷の俺が立っている。

もちろん影で吸収したんだけどな。

「へえー面白いじゃない、あんた」あれっ？なんかあの人スイッチ入った？もしかして

「じゃあこれはどうかしらっ！」と女は身体中から光線を放ってくる。

その光線を反転で全て相殺しながら俺は考えをまとめる。
さっきの不良がきれいさっぱりいない事から考えて・・・
恐らくこいつはLV4かLV5だろうな、たぶん・・・
さっきの奴らの中にも何人か能力者がいたはずだ。
そいつらがさっさと逃げたってことは実力差が分かったってことだ
ろう。

「ははっ」笑っちまうぜ、おい
久々に・・・本気でやれそうだな!!」

決着

「これでもくらいなっ！！」と俺は影のナイフを六本、女に投げる。
「はあ？あんた何処ねらつてんのよ」そうナイフは全て外れている。
「いいんだよ、黙って見てな？」「意味分かんないんですけど？」
と女は首を傾げている

「そのうち分かるさ」と俺は影に潜った。

「逃げようなんて、そうはいかないわ・・・」動きが止まる。
否、動かないのではない、

「動いたらバラバラだぜ？」と俺は影の剣を後ろから女の首に突きつける。

「影の糸・・・ねえ」と女は自分の身体の周りに張られている黒い糸を見ながら呟く。

そう動けないのだ。

「ずいぶんとこざかしいまねしてくれるじゃない？でも・・・」と女は言葉を切る。

「これは考えてなかったみたいね！」と女の背中から光線が放たれる。

「ばーか！後ろには撃てないとも・・・」

「思ってないけど？」「え？」

「ビックリした？撃ち抜いたはずの俺が今、お前の前にいるんだもんなあゝ」

「な、何でデメエ！？」「残念だったな？あれは俺の影分身さ」

「くそがああっ！」「おいおい」と俺は女に近づく。

「可愛い顔してんだからそんな汚い言葉使っなよ？」と頭に手を置く。
く。

「っ！！」と何故か女は顔を赤くした後

「うつさい！うつさいっ！！」と怒鳴り始める。

「ほら、もう糸も無いからもう人に向かってバカス力能力使っんじやねえぞ？」

と後ろを向いて行こうとした俺を、女の声がとめる。

「あんた、名前は？」「日向駿だ」「そう・・・私は麦野沈利よ」

「おう、よろしくな！沈利！！」

と今度は後ろを向いて走り出す。

やっぱり・・・本気で殺るのは・・・あいつと戦う時だな
俺の家族を殺した・・・あいつじゃないと・・・

決着（後書き）

まさかの麦野フラグ
WWW

対峙

その後、俺はもちろん綾との待ち合わせ時間に遅れ綾に能力で心を痛めつけられた後、荷物持ちと言つ名の身体労働を日が暮れるまでやらされた。

「死ぬ・・・早く家に・・・」と俺は寮の部屋に戻るために階段を上がっていた。

だが、途中で足が止まる。

いや、動かない・・・体に反して心がこれ以上行くな！行くなっ！！と叫んでいる。

「くそっ！！」心の声を無視して階段を上がりきる。

「おや？君は・・・」見覚えのない男が俺の部屋の前にいる。
が、そんなことはどうでも良くなった、一瞬で・・・

「おいっ！！てめえっ！！その子に何をした！！」

その男の背後に血塗れで倒れているあのシスターを見つけた俺は思わず叫ぶ。

「君には関係の無いことだよ」「関係ないか・・・確かにそうかもな・・・けど！！」

俺は男を睨みつける。

「そんな血塗れの女の子を見捨てられるかよ！！」

「そうかい、なら・・・」と男が殺気を纏う。

「排除するまでだよ」「やってみやがれ！」

「炎よ巨人に苦痛の贈り物を」と唱えた瞬間、炎の剣が男の手に現れる。

俺もとつさに影の剣を出す。

「ギヤリギヤリッ」至近距離でお互いの剣が火花を散らすだが、次第に俺の剣が沈み込んでいく。

「っ！！」男が距離を取る。

「おいおい、どうした？大口叩いてた割りにはたいしたこと無いな

「？」

「君のその剣・・・」と驚いた顔をしている。

「ああ、この剣の表面はな常に影の粒子が振動してんだよ、ダイヤモンドも切れるぜ？」

「そうか、僕は君を少し甘く見ていたようだ・・・」「ああ、学園都市のLv5を舐めんなよ？」

「fortiss931」「は？」「魔法名だよ、まあ君達には殺し名と言った方が早いかな？」

「本気って事かよ・・・面白え！！掛かってきやがれ！！」

魔女狩りの王（前書き）

更新、遅れてしまいすみません！
塾で忙しく更新する暇がありませんでした…

魔女狩りの王

「近接戦闘では僕に勝ち目はなさそうだね」と男は距離をとる。

「何だ？もう降参か？」「ふつまさかそんなわけが無いだろう」
そして男が呪を紡ぐ。

「灰は灰に塵は塵に吸血殺しの紅十字っ！！」「うおおっ！？」
巨大な炎の十字架が俺に襲いかかる。

こんなの喰らったら死ぬぞ！？

一か八か・・・「反転っ！！」「なにっ！？」さっき男が放った技を
そのまま返す。

「自分の技でも喰らっつけえっ！！」「ドゴォン！！」
やったか・・・？

「さすがに危なかったよ・・・まさか、自分の技を返されるとは思っ
てなかったからね」

そこには所々服が破け、血が滲んではいるが男が立っている。

さっきの炎剣で受けきったのか・・・化け物かよ、あいつ！

「これも駄目となると、やはりあれじゃないと君は殺せないようだ
ね？」

まだあいつ何かあんのか！？技を出される前に・・・

「駿？何やってんだ・・・？」俺の背後から当麻の声が聞こえた。

「当麻っ！？」俺が驚いて後ろを向いた事によって相手に時間を与
えてしまう。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」次々と
呪が紡がれていく

くそっ！ここは当麻を・・・

「おいっ！駿あいつは誰だ！？」「話は後だ！ここから今すぐ逃げ
ろっ！」と怒鳴るが、もう遅かった・・・

「もう友達ごっこもいいかな？」

と、男が笑みを浮かべる。そして・・・

「顕現せよ！魔女狩りの王！（イノケンティウス！）」

その声と共に巨大な炎の巨人がその場に現れる。

「やべえっ！！」当麻と共に避けようとするが

「遅いよ？…さらばだ！V5、そして巻きこまれた哀れな少年よ…」

そして、その場が灼熱の炎に包まれる。

「ご苦労さま、お疲れ様、残念だったね。ま、そんな程度じゃ1000回やったって勝てないってことだよ」

「へえ〜面白い事言うじゃねえの、顔に似合わずさ」「なにっ!？」

そこには、無傷の俺と当麻が立っている。

「悪いな、当麻…何だかんだで巻き込みまってるよ」

「気にすんなって！俺達親友だろ？」と言う当麻の言葉を聞いて笑う。

「当たり前まだ！！さっさとあいつを倒そうじゃねえか！！親友っ

！！」

と互いの拳を合わせる。

そして、俺達は男の方を向く。

「「見せてやるよ！！俺達の本気ってやつを！！」」

「面白いつ！！では、見せて貰おうじゃ無いか！！」

そして、再び死闘の火蓋が切って落とされる…

怒り

「グアアアッ!!」

再び、俺たちを魔女狩りの王の炎が襲う。

だが…「当麻っ!!頼むっ!!」「ああ!!任せろっ!!」

当麻が前に出した右手によって炎が打ち消される。

「さっきのもその右手のせいか…だが」と男は笑みを浮かべる。

「どちらにしても魔女狩りの王には関係ないけどね?」と再び魔女狩りの王の攻撃が俺達を襲う。

「だから…効かねえって言ってたろうがっ!!」

当麻の右手が再び魔女狩りの王の攻撃とぶつかる。

だが…

「っ!?!ど、どうなつてんだっ!?攻撃が…打ち消せねえ!!」

「いや!?違う!!打ち消せてはいるが…それを上回る回復速度をそいつは持つてるんだ!!」

こいつ…だがおかしいな…こんな回復速度を生み出すには何か仕掛けがあるはずだ…

「なかなか鋭いじゃないか、LV5…そうさ!この魔女狩りの王の回復速度はこの建物のどこかに貼ってあるルーンによって補われているんだよ!!」

ルーンが何かは知らねえが…それを破壊しない限り、こいつは何度でも蘇ってくるってことか…

「おい、駿っ!!俺…もう持たねえぞ!!」「なっ!?ふんばれ当麻っ!!」「む、無理だ…っ!!」

魔女狩りの王の攻撃を防ぎきれなかった当麻が攻撃の余波で外に投げ出される。

「当麻っ!?!」急いで下を見ると運良く無事のようにだ。

「はははっ!良いのかい?友達の心配は?」「はっ!てめえなんぞに心配されなくてもあいつは大丈夫だよ!!」

「それはそれは・・・美しい友情だ」

と男は余裕そうに笑みを浮かべている。

が、分からねえな・・・？

そう俺にはこいつの目的が分からない。

わざわざ、こんな小さな女の子を追いかけて、更にここまでの傷を負わせた理由・・・

だが、どんな理由があってもこんなことは許されねえ！！

「どんな理由があるかは俺は知らねえ・・・が、これだけは分かる・・・」

と言葉を切り、笑みを浮かべている男を睨み付ける。

「てめえのやってる事は間違ってるって事だっ！！」「君に・・・君に僕の何が分かるというんだ！！」

「はっ！分かるうとも思わねえな・・・！だがこれ以上俺の知り合いを傷つけるなら・・・いいぜ魔術師！！てめえのその歪んだ考えもろとも、墮としてやるよ！！光も届かない影の中にな！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0203v/>

とある科学の影使い

2011年9月15日15時20分発行